

第2回(仮称)滋賀県産業振興新戦略策定委員会議事録

1. 開催日時 平成22年6月22日(火) 10時00分から12時00分まで
2. 開催場所 滋賀県大津合同庁舎 7C会議室
3. 出席委員 委員15名中12名
川端委員長、尾賀副委員長、伊藤委員、大塚委員、小川委員、肥塚委員、
中本委員、西沢委員、花田委員、平山委員、安田委員、吉武委員
(欠席：井上委員、西本委員、安竹委員)
4. 議事内容

(1) 今後のスケジュールについて

事務局より[資料1]に基づき今後のスケジュールについて説明

質疑応答・意見交換

【委員長】

最初は3回でということ委員を受けられたかと思うので、そういう意味ではちょっと騙されたかと思う気がしないでもないが、一気に倍になったわけである。しかし、前回の委員会でもお話があったように、どう考えても3回では少ないと思う。この委員会を受けた限りは、きちんとしたものを作ろうという趣旨で進めていこうと思うので、致し方ないかと思う。この件に関して何か質問等、あるいは議論の手順を出していただけたらと思うが、いかがであろうか。特にならぬようなら、この[資料1]にあるスケジュールに沿って進めていきたいと思うが、それでよろしいか。

(2) 新戦略の策定に向けた論点整理について

【委員長】

それでは、本題である[資料2]の部分で、新戦略の策定に向けた論点について議論をお願いしたい。当初は、今回いきなり骨子をやるということになっていたが、前後するということになり、それに従って少し丁寧な資料を事務局の方で準備していただいた。それについて説明をお願いしたい。

事務局より[資料2]に基づき説明

質疑応答・意見交換

【委員長】

まず[資料2]の最初のところで、「新戦略策定の背景・趣旨は次のとおりとしてはどうか」とあるが、点線で囲まれた部分が前回の委員会が出た意見になる。それを踏まえて4つの黒いひし形が挙げられており、新戦略の策定・趣旨が述べられているがいかがか。

事務局の方で、この4つの策定・趣旨についてもう少し説明と確認をしていただけると、考える時間も少しあって良いかと思う。いかがなものか。

事務局より [資料 2] の趣旨・背景について説明

【委員長】

一番基本となる部分の説明をしていただいた。最後のところが特に、「従前以上に選択と集中の考えが重要となってくる」というご意見が出ていたが、その辺りがこういう議論をするたびに繰り返し出てくる意見である。かなり明確なビジョンを掲げないと、なかなかクリアーな戦略が策定出来ないということで、滋賀県独自のもの、この当たりが1つのポイントである。どこまできちんと実現するか、選択と集中という部分で、それが1つのポイントになるかと思う。これについては、とりあえず今は確認ということで、次に移らせていただきたいと思う。

2番目の「新戦略の性格」という部分は確認事項だと思う。2ページ目に行き、3番目の「期間」は4年間で、これも前回同様である。4番目のところで、「本県産業の現状と昨今の社会・経済情勢の変化」をこのように捉えたということであるが、ここでは本県産業の現状と、社会情勢の変化ということで、現状は第二次産業の占める割合が全国的に非常に高い。これは以前から本県が指摘されていることである。一方で第三次産業の占める割合というのが、全国との関係ではそんなに高くない。これも以前から、80年代くらいから指摘され続けてきたように思う。これが現状認識である。あと、昨今の情勢の変化としては、特に最後の「低炭素化社会への実現に向けた動き」であるとか、少子高齢化であるとかが問題になっている。それとリーマンショック以降の景気の回復、このあたりで本県の現状認識に関わると思うのだが、こういうことが抜けているということがあれば、ご意見をいただきたい。

【委員】

1ページの最初の右のところに、産学官連携の部分で「連携」という言葉が書かれているが、下の点線枠の部分に「基本構想に掲げる自律・協働・共生」というのがある。個別から共にという方向も分かるが、連携という言葉をもっと重視する必要がある。行政の縦割りの中で、行政が色々な連携を果たして、企業としては色々なところで支障が出ている訳である。連携というのは産学官の連携だけでなく、企業間連携、一次産業・二次産業・三次産業の連携を捉えている農商工連携、場合によっては二次産業同士あるいは一次産業同士という連携もあり得る。そういう意味では「連携」という言葉は非常に重要ではないかと思う。「自律」「協働」「共生」という3つの言葉は、民間の取り組む姿勢であって、ここには行政として色々な意味での連携という姿勢もフォロー体制として入れていただく必要があるのではないかと思う。私は連携という言葉の捉え方や言葉の意味は分からないが、連携というのは非常に重要になると思うので、この3つに「連携」も足していただきたい。

【委員】

2番目の現状認識だが、データを見ていると、第二次産業の占める割合が高いというのは当たり前で、むしろここで問題にしないといけないのは、このデータに基づく全国レベルで、

第一次産業が全国レベルの半分であることの方がむしろ弱みというか、現状認識とした方が
良い。第二次産業が高ければ当然第三次産業も低いというのは当たり前の話である。

【委員長】

少しまとめて議論したいと思うので、とりあえず論点だけ出していただきたい。他にはい
かがか。

【委員】

今「連携」という話があったが、環境問題でも、例えば行政、大学、各企業が、それぞれ
色々な形で環境に取り組んでいるが結局バラバラになって、本来ならそれを1つにすれば非
常に大きな力を発揮できると思うのだが、それぞれが若干競い合っているような感じがして、
企業イメージを上げるとか大学のイメージを上げるということになってしまっているの
ではないかと思う。連携という、1つにまとめるような組織を考えていく必要があるのではな
いかと思う。滋賀県の場合は、環境先進県と言われているが、1つになればもっと大きな力
を発揮できると思う。

【委員】

滋賀県の産業を取り巻く状況について、もう少し共通理解をしておいたらいと思う。せ
っかく「産業構造ビジョン 2010」を出していただいているので、滋賀県よりも国の産業振
興政策だから、ここをどう見ていくのかは大変重要かと思っている。みなさんも見てすぐ
分かることであるが、骨子の方針がどう評価されるか。出たばかりで分からないところあ
るが、日本経済の行き詰まりをどう直視するのがやはり非常に強く出ており、日本経済が
競争力を本当に劣化させてしまったところからスタートしているのが、今回の産構審の答申
だと思う。これは同時に、アジアを始めとした世界の競争関係の中で、日本が敗れていつ
ているという状況が大変厳しく問われている中で、色々な二者択一ではないというのがこの中
で出ているだろうと思う。

その中で、「戦略5分野」が設定され、かつ「多様な地域発展モデル」ということで出さ
れているわけである。このような厳しい情勢認識を、少なくともこれは産構審なので、日本
経済について、また日本の産業についてしているわけである。そこをどういう風に見ておく
のかと、滋賀県は関西（特に阪神地域）と中京地域の間にあるが、製造業との関係ではそこ
をどのように見ているのかということも滋賀県にとって大変重要なことである。もちろん他
にも重要なことはたくさんあるが、地政学的に置かれた製造業ということに限定すると、中
京地域と関西の経済界・経済圏がどのような現状にあるのかを厳しく見た上で、滋賀県の例
えば製造業であればどうするのか。同時に、この中では今まであまり出てこなかったが、医
療・介護・福祉ということを産業の観点からどう見るのか。私は一読しかしていないが、経
済産業省になるかと思うが、かなり突っ込んだ分析を経済産業省なりにしていると思う。そ
のあたりをどのように受けとめるのかということは大変重要かと思う。例えば「環境への
こだわり」という話であれば、既に北九州等で実験が始まっているが、スマートコミュニ
ティのようなことを、滋賀県が本当に本格的に取り組むかどうかと考える、そうした方が
いいというわけではないが、そのくらい突っ込んだ形で見ておく必要があるかと思う。その辺り

について、どういうふうに見たらいいのか、ということを見聞交換しておきたいと思った。

【委員】

前回の話の中で、第一次産業、農業のことについてかなり発言が多くあったような記憶があり、私にとっても分かりやすく身近な分野であるが、今回、背景・趣旨を含め、全くほとんど触れられておらず、多様な連携の活用とか、農水産ブランドのところにちょこちょこ出てくるが、製造業とか観光がどうしても中心になってきて、そうした「選択と集中のベクトルの強化」と最初にあるが、農業に関しては、ベクトルというのはもうこの指針では向かなくていいようなものと考えていいのかという辺りをはっきりさせていただいた方が進めやすいかと思った。

【委員】

私も第一次産業が気になっており、農業だけではなくて、漁業も気になっている。林業は少し難しいところがあるという感じがするが、強みのところで挙げている豊かな地域資源ということと環境を戦略に持ってくるのであれば、これを生業としている農業、漁業はこの指針の中でどう扱っていくのかが気になっている。

【委員】

「本県を取り巻く現状」の中で、先ほど意見があったように、二次産業の割合について今後を考えれば、滋賀県の二次産業は衰退の一途だと思う。おそらく日本国内に工場は残らない、全部海外に行ってしまう、完全な空洞化が起こる傾向はもう止められないと思う。高コストプライスの日本で、モノを作る必要は全くない。ということは、滋賀県の強みがなくなってくるということを前提として考えておかないと、滋賀県は国内だけで言うと工場がたくさんあってよろしいと考えたら大きな間違いで、世界にはもっと素晴らしいところがたくさんあるので、前提として第二次産業に重きを置いた産業振興なんてあり得ないと思っている。

もう一点、医療とか、介護・福祉は、これは言い方が少し上げつないかもしれないが、国の負債だと思う。資産じゃない。だから振興する必要はない。むしろ振興させた結果、国がやるべき話で、資産に持ってくる必要はないと思う。この際、産業振興に医療とか介護とか福祉という言葉はとばした方がいい。それを考え出すと複雑になると思う。

それから5つの「3KBI」に関し、ITはインドの専売特許なので、今更日本がとてまかなうはずがないので、ITは出すべきでないと思う。強いて言えば、環境・健康・観光、それから今おっしゃったバイオを含めた第一次産業、ここだけにもう少し絞り込んで、滋賀県独自の個性、地域資源を活かした形の産業振興に絞っていった方がいいと思う。

【委員】

2030年、20年先とかそういう話になってくると、知的資源というか質の問題に関わってきて、今工場が海外に行くというのも、要するに作業、労賃という視点で行くと、海外に行ってしまうのは当然の話になるが、では何が国内に残るのかと考えたときに、やはりそういう組み立てとかではなくて、一番基になる設計の部分であるとか、重点部分というのを日本

に残すと考えたときには、ではそれは誰がやるのか。ここでは、少子高齢化という、少子という子どもの数という話になっており、質の話が抜け落ちている。若い人から順番に今後、知的な質の高い人間を日本で維持あるいは増やしていくための視点がどうもないように感じた。

【委員】

製造業の話があったが、そこは、私は議論の余地があるのかと思う。これから10年、15年というのは、中国など新興国にパワーシフトしていくのかもしれないが、それから20年、50年後どうなるのかという、今中国が賃上げで騒いでいるように、日本がそうであったように、新興国というのはどんどん賃金が上がっていく訳である。ある意味で言えば、ヨーロッパから始まったその歴史はぐるっと世界を一周回ろうとしている。その回った後に日本にモノづくりがなくなってしまった場合、サービス産業だけでどうやって付加価値を稼いでいくのかという問題も加味して考えないと、50年後の日本にはどんな産業が残っているということを考えた時に、介護であったり健康であったりとした場合に、どこから付加価値を稼いできてそれを成り立たせていくのか。中だけでお金を回していくというのは資源を持っていないのもすごく不安な部分もあるし、材料を買ってきてものをつくらないといけないという部分もあるから、その辺りも踏まえて議論しないと、10年、15年の近視眼的にとられるのではなく、50年後100年後の姿も考えていかないといけないのではないかと思う。そういった時に可能性はあるのではないかと考えている。

日本の生き残る道は、人というのは日本の場合は一番の資源であり、住む人をいかに定住させていくか、そういった戦略が滋賀県では一番大切ではないかと思う。そういった意味では、教育の質を上げるようなところにいかに滋賀県として取り組んでいくか。それは子供もそうだし、労働者のトレーニングというのもあると思う。そうすれば放っておいても海外から資本投下してお金を呼び込んでくる事が出来るという面もあり、外資を運用してでも回せば、非常に経済的に豊かになるのではないかと思う。

【委員】

2ページの世界の動きのところ、「アジア諸国の台頭」が書かれているが、これはどのように見るか。つまり、一番は世界同時不況で次に台頭というのがあり、アジア諸国の台頭が滋賀の経済にとって脅威に見えるのであるが、そうではなくて、例えば中国が伸びているときに、今パッケージで輸出するということが考えられていて、1つの例が滋賀県にもあると言われている。そういう1つ1つの産業、1つ1つの企業というよりも、色々な連携のあり方というものを滋賀県の最終的なモデルとして言っていくという時に、滋賀の企業がリーダーとなる局面が考えられるのではないかと思う。アジア諸国の台頭をピンチとして見るだけでなく、1つの機会として見る方がいいのではと思う。

【委員】

連携というのは、実は一次産業、二次産業、三次産業という風に意識をして区分されているが、今後は、例えば一次産業に二次産業のノウハウを入れる、あるいは三次産業のノウハ

ウを入れるという形で、新しい産業、滋賀県独自の連携の中で、例えばバイオでも農業に活かせるし、二次産業の培ってきた技術・ノウハウを他の産業の分野に活かしていく。縦で一次、二次、三次と分けるのではなくて、それぞれ横断していくというか、そういう形の新しい産業を創造できる滋賀県になれば、他所と違う産業ができるのではと思っている。その1つの段階として「連携」という言葉を取り入れて、将来的には新しい、それを四次産業、五次産業と言うのか分からないが、システムごと出来る。今までみたいに一次、二次、三次という捉え方で、どれにベクトルを取るという次元ではないと思う。横断的なそういう形を滋賀県で作るといぐらいのイメージを私はしている。そういう形になれば、独自性が出るのではないかと。その仕組みごと海外に持ち込めればとイメージしている中で、連携というのが必要であると思う。

【委員】

産業の現状の2番目にもあるが、国内・県内の動きとして、1から3が挙がっているが、国内と県内と分けるべきか、あるいは県内を取り巻くということで、県内にしてしまうか。県内だったら県内の動きとして、いわゆる日本全体と県内の動きというのは結構ズレがあると思う。

【委員】

この計画タームは来年から4年間。今年までの計画の内容はあるが、それを踏まえて本県産業の現状であるとか社会情勢・経済情勢の変化とか外的要因があるので、今後4年間を見直そうという位置付けなのか。

【委員長】

元々そこから先がないので、その続きを作るというのがまず前提である。

【委員】

22年度で終わる内容の指針の評価は前回で終わっているということか。

【委員長】

一応これは完全には終わっていない。もちろん、年度が完了した後で、たぶん総括が行われるであろうし、とりあえずフォローアップは出来たというものである。

【委員】

前回、資料をいただいただけであるが、きちんと評価をした上で何が変わったので、今後4年間をどうするかという議論が一番具体的な話じゃないかと思うが、費用対効果である。今、財政は非常に大きな赤字を抱えている訳である。その中で色々言われていることは非常に良いのであるが、決してそれが全部できる訳ではない。

我々企業として色々な意見が出たが、海外との競争、あるいは海外に出て行くということは決して行政を期待してやっている訳ではなくて、足は引っ張ってくれないようお願いしたい。滋賀県あるいは日本として今まで海外戦略としてやってくれたことがあるかということ、

決してそのようなものはないのではないか。例えば、この前トヨタがアメリカで非常にバッシングされた訳だが、日本政府として何かしたかと思う。多分中国だったら、間違いなく中国政府としてメーカーを確実に守ると思う。日本は決してそんなことはしない。これが日本のいわゆる行政の基本的な姿勢だと思う。それを今更その強力な行政を、指針を出して強力な組織として海外に打って出るとかという基本的な戦略を行政として本当に持っているのかと思う。その辺の姿勢をきちっと、大きな強い行政を本当に目指すつもりなのかというのをはっきりしていかないといけない。話としては非常にいい話と思うが、実際には何も動けないという結果になるのではないかと思う。

【委員】

行政の話が出たので確認したいが、前回、縦割行政をなくそうという話をした。また、農業について沢山話が出た。しかし、今回全く触れられていないというのは、いわゆる商工観光労働部という部署は、第二次産業・第三次産業が守備範囲で、農業というのは守備範囲外だから拳がってこなかったということでしょうか。

【委員長】

今の質問に対しては、1つは前回の総括の問題を指摘されたが、その部分は今回の議論の始まりにもつながるのかという点、あと農業が入っていないという指摘であるが、それは縦割りの関係が絡んでいるのかという2点の質問に対して、答えられる範囲でお答え願いたい。

【事務局】

まず総括の点であるが、私どもも当初3回の中でこういった形で総括と言うか、これまでの取り組みをご覧いただけるかということで、前回の資料を考えさせていただいて、先程の一覧表が具体的なプロジェクトということで説明させていただいたところを踏まえて、その前のところの[資料5]というところで、新指針の改訂版という中で、こういったところを重点的にやろうというプロジェクトを立てさせていただいた。そういった具体的な部分の資料について、個票をもとに総括と言うか構想の振り返りをさせていただいて、取り組み成果と今後の課題というものを提出させていただいたというのが現状である。そういったところで一定の振り返りをさせていただいた中で、23年度から始まる新戦略の中では、少し具体的に、もう少し重点的な取り組みをもっと色濃く入れることによって、上位計画になる基本構想の、更にその部門別ということで、今回はそれぞれの中で役割を明確にさせていただいたという意識を持っているが、その中でも具体的なプロジェクトがどうであったかというのを少しご覧いただきたいということがあって作らせていただいたものである。一定の、そこでの総括をさせていただいたというつもりではいた。であるから不十分ということのご意見等も踏まえ、そこについては考えさせていただきたいとは思いますが、前回の第1回で一応はご覧いただいて説明はさせていただいたという風には考えていた。

もう一点の農業に関してだが、決して縦割りという訳ではなく、私どもとしては産業振興ということでこれまで進めさせていただいており、実際に指針を作って取り組みをさせていただいているところである。その中で、中小企業・新産業部門とかそういった部分での取り組みを主眼に置いて作らせていただいている。それが新指針ということで、さらに改定をす

るということで、産業部門といっても第二次・第三次のいわゆる企業、中小企業といったところがメインではある。ただ、先程おっしゃるようにそういった部分から見た中で、決してその農業の部分はいらぬという訳では勿論なく、農商工連携などということで、農業振興の観点から見させていただいた時に新たな分野ということで、取り込むのは取り込むということで、施策に広がりを持たせていただいているというのが現状である。全く立ち位置が違う農業・漁業に従事されている方の部分から振興施策を作るところまで私どもは正直考えておらず、どちらかという先程申し上げたように基本構想という県の、これから進めていく、描いている絵を基にどうやってこれからの県政を行っていくかという基本構想がある。それぞれの各部局の中で、いわゆる重点的にやらなくてはいけない所掌事務の中で進めていくというのは、部門別の計画というものが確かにあるかと思う。その部門別の計画というのが全く離してしまうということでは勿論ないが、重点的に部局が進めさせていただいている計画のこれまでの経緯もあるので、農政なら農政のところでの産業振興の計画を検討して作っているということである。その間の連携は必要であるが、立ち位置とすれば全く別の農業の観点から農業の事業の施策の展開を直接この中にいれるというのは私として違和感があり、連携ということに視点ということで今回は作らせていただいたというのが実情である。

【委員長】

恐らく出発の段階で、他部局の部分を足場にしたものは出せないと思うので、これを縦割りの弊害というかどうかは別として、ただ、連携の重要性とか今後の産業のあり方を考えた時に、農業を外して考えることはありえないと思うので、この委員会がそういうことを強く主張していく中で、他部局への働きかけがおこり、結果として連携が実現化していくというステップになっていくのだろうと思うので、そういったことも含めてこの場で議論をすればいいのではないかと考えている。

最初の部分であるが、本来は1ページの背景・趣旨のところ、前回の場での戦略の総括、課題なりが触れられていても良かったのではないかという気がする。きちんとした総括というのは、1回目の取りまとめがされていない。先ほども説明があったが、プロジェクトベースで事務局が整理した成果、積み残しの課題が前回提出された。そこをにらみながら今回の新しい戦略の原案のところ、前回からの積み残しの課題と言うか、連続性みたいなものたどるとするならば、どのあたりがポイントになってくるのか簡単で結構なので、指摘していただくと我々の理解も深まると思うが、いかがか。

【事務局】

一次産業とか農商工連携の話であるが、例えば我々の方では二次産業と三次産業を掛けて六次産業というところから、一次産業と二次産業と三次産業を足して六次産業という理解をしており、それをもっと平たく言うと、農商工連携のような形で我々産業と商業だけではなく、農業と連携していくことが必要ではないかということで、論点の中で農商工連携が必要をうたわせていただいている。それから委員からご指摘のあった、2ページ目の4番目の(2)「アジア諸国の台頭」のところであるが、書き方がまずかった。ご指摘の意味も含まれており、アジア諸国が台頭していく中で、それと競争していかなければいけないというこ

とだけではなく、例えば観光で言えばアジア諸国から来ていただくと、産業で言えば部材をアジア諸国に供給してそれを組み立ててアメリカで製品を売っていただくという風なことで、アジア諸国の台頭を利用していけないかという意味合いで書かせていただいた。

【事務局】

前回、滋賀県産業振興新戦略策定の視点ということでペーパーを作らせていただいた。その時に、新指針と改定版の重点戦略とプロジェクトという取組項目を挙げさせていただいている。その中では環境とか健康福祉、バイオ、観光、経済振興特区、起業事業化、県民活力導入、産学官連携、改定版では地域ブランド、環境、新産業創出、企業誘致、まちづくり、観光、人材育成という項目を出させていただいた。今回、選択と集中という中で、ある程度絞った形での戦略を立てたいと言うことで、議論の資料を作らせていただいた。環境という分野について県としては、これまでも取り組んできたしこれからも継続して取り組んでいく大きな柱だと考えている。地域資源を活かした観光についても、海外に目を向けた形での誘客も含め、[資料2-2]のところに入れさせていただいた。柱はかなり絞らせていただいたという気はする。柱を選択させていただいて、ものづくりもそうだが、今まで取り組んできたものを活かして引き続きやっていくということで、観光等を挙げさせていただいているところである。

【委員長】

費用対効果も含めた正式な総括はできていないが、確かに前回は委員をしていたが(滋賀県産業振興新指針改訂検討委員会) 前回、まちづくりに至るまで、かなり総花的にフレキシブルに議論をした記憶があるが、それだけに焦点が見えにくかった部分もあったので、今回はそういうことを踏まえて、選択と集中ということでこういう案がでてきたということである。具体的などころで前回どうだったかという話が出てくると思うが、そのときはよろしくお願ひしたい。

まず、1ページ目のところで、このあたりは共通認識ができていないと個別のところ議論が行ったり来たりすると思われるので、少し時間を割いてやりたい。1枚目のところでは、連携ということが重要になるのではとの意見が出されたが、オーガナイザー機能を果たすような組織、連携をする限りは各主体を横断的に見ていくような組織の必要性がある。そのようなことを念頭に置きながら進めていきたいと思う。事務局には、連携の視点の重要性みたいなことを、ここで追加していただけるといいのではないかと思う。

2ページ目のところで、本県産業の現状で産業分類の議論の有効性についてであるが、本県では、二次産業が高く、三次産業があまり成長していないということが問題になりかけたのが80年代からだったと思う。当時は、「産業の高度化 三次産業の成長」という捉え方がなされていた。二次産業から三次産業へという国全体の産業高度化の流れに照らすと本県は遅れているのではないかという議論が稲葉知事の時代にあったと記憶している。三次産業のウェイトが低いと少し後ろめたいイメージがあったのかもしれない。ただ、二次産業が高いということは逆に本県の強みの一つになっている。それだけ蓄積、歴史があるということであるから、そういうものをいかにうまく活かすかという視点が必要だと思う。先ほども指摘があったが、一次、二次、三次というような産業分類を考えるのではなく、まさに連携の概

念を発展させたような総合的な産業システムをいかに構築するかということこそが重要である。十数年前からバイオと言われているが、バイオ産業を1つ例に取り上げてみても、それ自体は農業、工業と先端技術の融合分野でもあるので、実質的にはそういう部分はかなり進んでいる。ただ、認識レベルでは相変わらず一次、二次、三次の産業分類が根強く生きているので、なんとなくそういう枠組みにとらわれがちであるが、この委員会の議論の感覚としては、そういうことではなく、新たな産業の枠組みを考えていく必要があるのではないかと。今後は、滋賀県から産業の1つのセットというようなものをアジアに輸出するようなことも考えられるのではないかとのお話もあったが、たぶんこれからの時代は、システム、パッケージ、セットなど一次も二次も三次も取り込んだようなものを1つの単位として海外進出などを考える時代なのかと思う。

もうひとつ重要なことは、人材の話があったが、産業が空洞化するかどうかということがしばしば議論になるが、その場合に人材育成をしっかりとすることが産業成長、産業の生き残りの1つのポイントになるというのは確かにご指摘のとおりであるし、これは新戦略の中でもやっていかないといけないと思う。それからご指摘があったが、非常に厳しい状況をどのように捉えるか、それに対して我々はどういう戦略を描くのかということが問われている部分があるだろうと思う。どうしてもビジョンというのは言葉が踊るといって、文言先行的なところがあって「高く掲げる」という趣旨があるので、少し現実離れしたようなものができがちである。現状をみると、これまでのような謳歌的な話ではなくて、置かれている日本経済とか本県の現状の厳しさを克服し、切り開く覚悟、切り開けるようなものが描けるか。今後の議論の中でやっていなければならぬだろうと思う。

少し話を進めさせていただくと、2ページから3ページにかけて、「将来目指すべき本県の産業の姿」ということで、長期的・中期的な姿が挙げられている。例えば長期的な姿で、ITとか福祉をあえて書く必要はないとの意見があったが、この辺りは細かく議論しても色々意見が分かれるだけだと思う。今の議論を踏まえながら、各委員の議論と外れたような話は書かれていないと思うので、産業のあり方、先ほどあった一次、二次、三次の枠組みを超えた新たな産業システムの構築を図るところを長期的な姿に入れていただいたり、あるいは人材育成を加えていただいたり、産業間の連携だけでなく様々な連携の視点を入れていただくことでシナジー効果の高い県の産業の姿を強調していただければよろしいかと思う。

具体的な4ページ以降のところを見ていただきたいが、4ページから戦略の視点が書いてある。本県の強みと弱み、先ほど事務局からの説明にもあったが、この戦略というのは別紙の[資料2-2]があり、少しイメージとして書かせていただいた。一番下の部分の横に向かって左側が「強み」、右側が「弱み」。グレーに塗っている項目があげられている。真ん中より少し右側の縦軸方向に「戦略の方向性」というところがあり、こういう縦横の軸を設定して、強み弱みと戦略の4つの方向性を取り引きする中で考えていこう、ということである訳である。そのベースになる本県の特徴から少し議論を始めたいと思う。この戦略マトリックスを参照させていただきながら、強みと弱みはこういうような関係でいいかどうか。こういうような項目が挙げられているが、詳しくは4ページから5ページにかけて説明してあり、これは前回の第1回目の委員会での意見などを踏まえて抽出していただいたが、強みと弱みの項目についてこういう項目立てでいいか、あるいはもっとこういうところがあればいいん

じゃないかとか少しご意見をいただけたらと思う。

【委員】

前回に強みと弱みという話をした手前いくつかあるが、1つは本文のところに強みと弱みを書くかということである。私はそういうつもりで言ったつもりは全然ないが、それを前提にこういうことをする時に、「強み」「弱み」「組み立て」についての意見であるが、見ていただいたら分かるように、「強み」「弱み」の上の方はどちらかということ、機会と脅威のうちチャンス、機会の方がざっと並んでいる。通常こういうことをする場合に、強み、弱みはこれでいいのかという個人的な意見はあるが、それとは違って強み、弱みそれぞれに機会と脅威が当然あるということである。例えば分かりやすく言うと、「大学の立地」と書いてあるが、大学があるというのは1つの機会であるが、当然18歳人口が減って2019年以降さらに激減している中、本県で大学が勝ち残っていくのか。既に日本全体で40数パーセントの大学は定員割れしており、滋賀県はまだマシだがそれでも厳しい大学があるかと思う。そういうことを考えると、「機会」と「脅威」というのは当然あるだろう。モノづくり県ということにおいても当然機会もあるが、大変な脅威があるわけである。2030年の姿のところ「グローバルな展開の核となる研究開発が活発に行われ」とあるが、グローバルな展開が本当に滋賀県にあるのかと非常にびっくりしているが、こういうことを考えた時に、機会と脅威、強みと弱みのところは、もう少し突っ込んでみていただきたいなと思っている。組立がそういう形できちんとした上で、そこから何が拾えるのかというのが大切だと思っているので、まずはきちんと分析した上で、それから拾い上げるべきことを拾い上げて論点として、本文のところから抜き出していくのは抜き出していかれたらいいのではないかと。やや細かくなったが、全体の立て付けのところについての意見である。

【委員長】

他いかがか。項目の中でも結構であるし、枠組みそのものに関する意見でも結構である。ここでの事務局の提案は、「強み」「弱み」を横軸において、縦軸に「戦略の方向性」を設定して、縦横の関係でいったらどうかというのが1つの提案である。それがわかりやすいかわかりにくいかわという問題もあるが、いかがか。

【委員】

先ほどの話と関連するかもしれないが、「弱み」について本来は第一次産業かなと思う。今、林業でも大変な財政状態になっている。結局、最初の話に戻って申し訳ないが、それを書けないのはある部署への遠慮があるのかと強く感じてしまう。本当に連携するのであれば、その垣根を壊さないと何も始まらない。例えば、農業をメインテーマに挙げてしまうと、その部署の人が「何だ、自分たちの仕事を取っていくのか」というような部分があるという話を以前に聞いたことがある。その垣根を取って、逆に言えば農業がこれから有効であり、滋賀県の産業として育てていこうというのであれば、この場に農業の方にも来ていただいて、一緒に場に入って議論をした方が良くはないかと思う。

【委員長】

「弱み」のところで、他の部局の担当のものをストレートに挙げるのはどうかと思う。

「弱み」のところでは、おそらく一次、二次、三次の連携の弱さみたいなものはあるだろうと思う。その程度なら書けるだろうという気もするが、この項目立てに関しては私も事務局に提言したところもある。右側の「弱み」のところは第三次産業や滞在型の観光など、産業レベル、左側の「強み」のところは、何となく第二次産業を前提としたような、立地条件のようなものの強みが挙げられていて、少し集計水準が右と左で違っている。だからもし右側に第三次産業を書くとしたら、強みは間違いなく左側では第二次産業ということが出てくるだろうと思うが、少しバランスが悪いので右側の弱みというか課題のところでは、例えば「優位性」と「課題」みたいな形の方が表現としてはよいかも知れない。

【委員】

本文としてはそうかも知れない。ただ明確に言うと、こういう表現を一度やっておいたらいいと思うが、本文に書く時は委員長ご指摘のとおりしないとまずいと思う。

【委員長】

また表現は考えていただくとして、わかりやすいことはわかりやすいので、議論はこの状態で進めさせていただきたいと思うが、「強み」のところでは、具体的な本県の立地条件というか競争条件というのが挙がっているので、右側のところもそういうような表現に変えてもらえるとよろしいのではないかと思う。

【委員】

課題の部分こそ重要という気がするが、これがあまりに少なくおざなりな気がした。「強み」の部分で挙がっているところも、視点を変えれば課題の部分となることもあると思うし、例えば環境意識が高いというあたりも、環境維持に対する負担が県財政を圧迫しているという面もあると思われ、両面あると思う。もう少し弱み、課題のところをもっと率直に洗い出してもよいのではないかと思う。

例えば外需に打って出るにしても、滋賀のイメージが弱いことが大きな課題である。よく京都の陰に隠れて扱われている、今後大きな課題である。また、小さな事業をやっているのは、県内の内需、県民がお金を使わないというのが、県内で事業をやっていくことの難しさがすごく県民相手に感じる。

【委員長】

そういった感じで我々の方からどんどん意見を出せば、またそれを取り入れて再整理してもらえる。忌憚のない意見を、これは弱みじゃない、強みじゃないといった意見も含めて出していただきたいと思う。

【委員】

1つ1つ具体的にという話ではないが、全体を見ていて、お金を使う話とお金が入ってく

る話が混在している。もっと民間的に言えば、こういう一覧表であっても、個々のもののキャッシュがインなのかアウトなのかという視点がない。そういうのが県の戦略として最終表に出るということはないと思うが、考えていくプロセスとして、先程の健康・医療・福祉のような話でも、産業としてインプットの話として見るのか、住民サービスとしてのアウトプットとして見るのか、そしてプラスマイナスはどうか。企業では黒字にしないといけませんが、住民サービスとして最初行われるので赤字だが、その分どこかで税収が増えるような手が打たれていくというバランス感覚がこの表では見にくいので、個々の部分の良し悪しがなかなか言いにくい。道路をつくるという話も、ある面ではいらない道路を作っても仕方ないが、いるところはまだまだある。滋賀県では第二名神だけで済む話ではない、内陸部に行くと電車が通ってないところが多い。1つのことをやってそのことで生まれる付加価値、キャッシュが、それがどこかへ流れてまた循環するといった体系、流れが見えにくいと思っていた。県民の方の消費が増えるということは回り回って県民の所得が増えて初めて消費ができるということで、流れがどうも見えにくい。お金の面で見れば、もう少し整理できるのではないだろうか。

【委員】

戦略の方向性に絡めてであるが、本県の産業の目指すべき将来の姿は、大ざっぱで非常に夢のない書き方だと感じる。20年後、滋賀県ってというのはこういう風になっている、県民が頑張っただけで官民が一体となって努力すればこういう滋賀県像になるということ、20年先ということであれば書いた方がいいのではないかと。例えば、研究開発型の企業が増えて、海外からもたくさんの技術者が来るとか、大学にも海外の留学生がたくさん来ているとか、あるいはたくさんの観光客が滋賀県に来て住民との交流ができている、逆に言えば琵琶湖が本当にきれいになって世界に誇る素晴らしい環境成果が出ている。できればそういう面を、実現するかどうかわからないが、そのためにみんなが努力しようではないかという目標設定をすれば良いのではないかと思う。10年先ならなかなか難しいが、20年先だったら頑張ればこうなると、だから10年先が大事だ、3年先が大事だと見られた方が、夢があっていいのではないかと。

【委員長】

この部分は、おそらく行きつ戻りつするだろうと思い、とりあえずはお話いただいた。実はこのマトリックスの一枚物の表に書かれていることは、戦略というよりも、むしろ戦術レベルの政策に落とし込む時の課題のようなものが挙げられている。全体の方向性がどっちを向くかというのが、まさに将来の姿であろうと思うが、戦略を描くためには、将来の姿、目標地点をはっきりとさせた上で、それに向けてどういう道筋を描くかという戦略（戦略）の話になるだろうと思う。本当は将来の姿が実は非常に重要になるが、それだけを議論するとまとまらないだろう。色々意見が出てきて、收拾がつかなくなる可能性がある。とりあえずは具体的なものを見ながら行きつ戻りつ出来ればと思っている。今の意見のように、もう少し長期的な姿、夢のある姿、夢のあるというのは具体的に、既に観光の視点が一枚物の中に出ているが、将来の着地点としては、多くの外国人観光客が滋賀県の地域資源を十分に満喫するような社会になっているとか、そのような姿が描けるのだろうと思う。

この辺りは重要であると認識しつつも頭の隅にとどめ、具体的な内容の中で立ち戻りながら、少し逆の順になるかもしれないが進めていきたい。

【委員】

[資料2 - 2]を見て意見を申し上げるのは適切かわからないが、例えば雇用という面で考えた時に、これから団塊の世代がどんどん高齢化する訳であるが、今までの高齢者と違うように考えていかないといけないと思う。そういう意味では、高齢者にどんどん働いていただく、どんどん学んでいただくという風に考えていく必要がある。

もう1つは、この中で教育というのがあまり出ていないと思った。例えば環境教育というのを考えた時に、どこにくるかというのは少し難しいが、「雇用創出」と「豊かな地域資源」のクロスのところ、例えば琵琶湖というまぎれもなく日本で唯一の素晴らしい資源があるわけなので、しかも琵琶湖で何かやる場合は滋賀県に来てもらわないといけないということもあるので、そういうところに環境教育で雇用の創出が図れるのではないかと1つの例である。

もう1つの例は、これも何も書いていないところであるが、「交通の便・住みやすさ」というところと、「環境へのこだわり」のクロスのところである。ここに例えばコンパクトシティ、スマートシティ、先ほど道路の話があったが、色々なタイプの村、町、都市があるわけで、これからたぶん日本国中の色々なところで多くなってくると思われる買物難民の方などに、こういうのはいかがですかと提示するような産業の興し方もあるのではないかと思った。これに関しては、すごく新しいことをやると見学者が来てくれるので、とても新しいこと、しかも滋賀県ならではのことをやるとたくさん集まるのではないかなと思う。大津の商店街だったか、菱屋だったかで、日本で最初にアーケードを作ったということで、たくさん見学者が来られたそうである。10年か20年前に伏見がソーラーアーケードというのを作ったときには、そこから見学者が来られたとおっしゃっていた。新しいことをやって見に来ていただけるというのは、県民にとっての誇りになるかと思う。そういう意味では思い切って産業振興してほしいと思って、空欄になっていてさみしいと思ったところについて述べさせていただいた。

【委員】

人に関して、県民性、例えば非常に高校進学率が高いとか、どういう県民性かということが抜けているのではないかなと思う。モノというか物質というのは環境が変われば変わるが、人というのは変わらないだろうということで、近江商人気質というのはあるかと思う。そういう意味で取り上げる必要があるのではないかと思う。

長期的な姿に関して言うのであれば、環境、健康福祉、観光に、農業を加えていただきたい。そしてバイオとITというのは、あくまで産業ではなくテクノロジーであって、横串として環境に使われたり観光に使われたり、あるいは農業に使われたりという分野だから、技術と産業とは別に分ける必要があるのではないかと思う。ITは産業化にとってもまさに助け、手段になる。あくまでテクノロジーであり技術であるから、これ自体を産業化しようとするのはあり得ないのではないかなと思う。

【委員】

県民意識ということで、提案の中で、おそらく私がNPOとしてここにいる意味というのは、NPOと関わっている人の率が国内でも高いというデータが確かあったと思うが、環境から発信して地域のことをやっていこうという意識が高いというのは強みであると思う。女性や高齢者の就労、コミュニティビジネスとかいう視点を、今までにない新しい住民ビジネスといったものが、これから望まれていくということが必要だという辺りを少しどこかで入れられたら、新しい形になるのではないかと思う。

【委員】

国際化を戦略の方向性に挙げていただいているが、その中でも観光、今回中国のビザの所得制限が低くなったということで、また中国からたくさんの方が来られるかと思うが、例えば、2020年までに2,500万人、将来的には3,000万人、これが5日間滞在されるとなると、1億5千万人滞在されるということになる。これはやはり滋賀県が魅力ある観光で取り込むということが大切ではないかと思う。人口はどんどん減少するわけだから、観光客が滋賀県に滞在するというのは非常に大きなインパクトになると思われる。それに対して、県民の受入体制、例えば心から歓迎するといったことや、中国人の方を採用する。観光だけではなく先進的な工場見学を組み入れるとか医療機関を組み入れるなど、魅力ある滋賀県にすれば観光客も増えるかと思う。従来のような文化財だけでは来ないのではないかと思うので、その辺も踏まえ戦略を立てていく必要があるのではないか。

【委員長】

戦略の方向と出ているが、私も少し気になるところがあり、先ほどストラテジーというのはもうちょっと積極的な意味合いがあるという話をしたが、それで言うと「環境へのこだわり」は非常に能動的、積極的なもので戦略の方向性として、環境にこだわって、そこから新たな雇用を創出するだろうし、新たな産業を創出するだろう。ただ、「国際化対応」「少子高齢化対応」というのは、どちらかという現状対応であり受け身である。だから、「国際化対応」というよりむしろ、委員からのご意見があったように、「国際化した観光産業の育成」とか「創造」というような立場でとらえた方がいいのではないかと思う。少子高齢化も現状への対応なので、そうではなく、例えば「高齢者を意識した産業創造」とか「産業の取り組み」とか、積極的な方向性を示した方がより分かりやすい。雇用創出というのは様々な取り組みの結果として表れるもので、雇用創出が戦略の方向性かと言われる違和感があるように思う。今までの委員のご意見を聞いていても、環境へのこだわりで、新たな環境教育産業が発生して雇用が生まれる、観光産業が発展してどんどん国際化が進んで雇用が生まれる、というように雇用の問題は最終的にどこでもついてくる。もう少し整理が必要なのではないかと思う。

【委員】

貸借対照表的な見方で資産、負債とすると、資産で言うと一般には人口は少ないより多い方がいい。都市インフラは進んでいる方がいい、利便性は高い方がいい。自然は豊かな方がいい、観光資源はたくさんあった方がいい、就労場所はたくさんあった方がいい。知的資源、

教育資源はたくさんあった方がいい。それらは逆に負債の部分としてお金がたくさんいるし、健康福祉、介護などが膨らむという相対のものである。その中で、滋賀県はここがすごい、世界一という言い過ぎだが、日本一のものがある。そこが一番の強みだと思うし、突き詰めて考えると、ブランドとしては「琵琶湖」と「近江商人」しか浮かばない。これが滋賀県の強みで、これを暮らしや産業に発展させるのか、農業に発展させるのか、人の心に発展させるのか。滋賀県はもともとマネタリー経済という「儲けたらなんぼ」という気質ではなくボランティア経済で、「世間様がよかったら私は商売が続く」という根本的な思想がまだあると思う。ずいぶん他所からの方もいらっやって滋賀県はケチとか言われるが、そういう「もったいない気質」をもっと大事にすべきだと思う。琵琶湖の水と環境とかがベースになって、資産をどう滋賀県らしく伸ばすか、いらないものはいらないと思う。例えば滞在型の観光といっても、ホテルの数から観光資源でも京都には絶対かなわない。極端に言えばそれよりも滋賀県に住んでもらい、たまには東京の別荘に行くとしてもらえばいい。そういう素材を持った県だと思う。東京にあるものをこっちに持ってくることはないと思う。

【委員】

戦略の方向性であるが、「バイオ」というのは、関西の中で、滋賀県においてどうやっていくのかはなかなか難しく、「環境」をどうふくらますかという中でその問題をどう理解できるのかといったことがあるかと思う。「観光」は色々なことに関わることから大切で、国際化の観光もありかと思うが、むしろ国際競争の中で、ものづくり県として生きていくという話であれば、滋賀県の強みを活かして10年後も20年後も国際競争にも耐えうるモノづくりというような形のポジティブなイメージが必要。ITはもっと活用すべきだが、産業として育成するという立て付けは厳しいのかと私も思う。雇用創出は結果ということは私も同意見である。少子高齢化についても健康福祉という形で書かれているが、もう少し深めたらどうかと思う。私は和歌山県で介護施設経営や介護人材の育成プロジェクトに関わっており、住民に求められている福祉サービスを提供していくビジネスとしてきちんとやっていくことは重要であるかと思う。産業だから利益という話にされると、そのようなことで成り立つ状況ではないことは私も理解しているが、サービスとして成り立っていけるようにするには、産地産業化と言うかビジネスとして成り立っていきように滋賀県で考えていかないと厳しいだろう。医療や介護の現実と切り結びながら、この分野で検討していくことが必要で、ポジティブに拾うかを考えていく必要があるかと思う。

【委員】

事業者のニーズ、産業振興の為のニーズと滋賀に住むというだけの人のニーズは相反する。私は湖西に住んでいるが、振興事業の計画が出て他府県から道路が入ったら困る、自分の今の状況は変えたくない、他府県から人が来て汚してもらったら困る、という住民の声があるのも事実である。その辺のいろいろな性格というか、1つ形に入れておいてやらないといけない。新規の方で革新的な方もいるが、そのギャップがあり悩むことがある。それを考慮に入れると何も進まないかもしれないが、現場レベルではそういうことも多々出てくるので、頭に入れて産業支援を考えないといけないのではないかと思う。

【委員】

「強み」と「弱み」のところで「交通の便が良い」とあるが、彦根に住んでいる私にとって交通の便が良いとは言えず、これを考えるときに誰にとって住みやすいのか、もう少し地域の特性を細かく分けて考える必要があるのではないかと思う。

また、多様な大学の立地という点において、大学があることの何がいいのか。学生がいるのがあるのか、教育が行われるのがあるのか、教育の場としていいのか、もう少し要素を細かく分けて考えるべきだと思う。

最後に、私が環境を研究している立場としては、「琵琶湖」という言葉がないのは気になる。琵琶湖のことをどうこう言えるのは滋賀県だけである。産業のことで琵琶湖をどうするというのではなく、シンボルとしてでも「琵琶湖」というキーワードが入っていた方がいいかと思う。先ほど第一次産業に関して話をさせていただいたが、それについても今すぐ漁業がどうなっていくということではなく、この指針を進めたときに、例えば何年後かに漁業はこういう風に豊かになったということ、ビジョンのところに書き込めたら滋賀らしさを打ち出していけるのではないかと思う。

【委員長】

いろいろとご意見をいただいたが、時間の方が来てしまった。[資料2]の7ページにある「人材育成」や「農商工連携」は、個別の部分を見ると戦略効果を高める取り組みというよりも、戦略の方向性なりに出して強調していくべきということが今日の議論で明らかになったと思う。

また8ページの「情報発信」については議論できなかったが、先ほど「県のイメージの弱さ」というのが大きな課題というご意見もあったので、その辺りも課題あるいは戦略の方向性に格上げしてもいいのかなという気もする。そういったところも含めて今日の議論を踏まえ、事務局で整理し直していただきたい。

確認であるが、今日の議論において、横軸に「優位性と課題」縦軸に「戦略の方向性」を置いて、このマトリックスで戦略を組んでいくという基本的な枠組みについては異論が特になかったと思うのでご了承いただきたい。

また9ページの「組立てに向けて」というところに4つ菱形があるが、4つ目の「重点を置くべき分野」というのは、産業として育成していくべき分野と技術として利用する分野の切り分けの話も出たし、農業との連携強化の話も出たし、人材育成、あるいは環境というものも1つの重要なキーになるだろうという話が出たので、そのような中身については一定議論していきたい。10ページについては、評価は重要な部分であるので、次回改めて議論させていただきたい。

今日の議論についてはいったん整理していただいたものを改めて次回少し時間をとって議論したいと思っている。

(3) その他

次回開催日程について